石鹸に纏わる問題発言について

桝田珪赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
石鹸に纏わる問題発言について

【Ｎコード】
Ｎ６８９９Ｙ

【作者名】
桝田珪赤

【あらすじ】
リゾット×プロシュートで二人の馴れ初めと、年月の経過と油断が生んだリーダーの失言が原因でメローネとギアッチョとペッシにリーダーがカミングアウトをする話。

馴れ初めは一言で言うなら「なし崩し」だ。
初めて会った時からリゾットはプロシュートが気になっていたし、一年が経てば好きだと思えるようにはなっていたし、二年が過ぎればこれは恋だと納得出来る位にはなっていた。
所で、暗殺を生業とするなら当たり前だが、リゾットは他人に対し警戒している。プロシュートは寧ろ生来の性格として警戒心が強いが、しかし二年もの間背水の陣で粘り続ける運命共同体として過ごせばどうなるか。答えは簡単だ。油断しない人間などいない。
「リゾットよォ〜、テメェ、なんらよその頭巾はよォ〜」
「プロシュート…」
「ははっ、面白れぇ。癖付いてやがる」
普段酒に滅法強い人間が飲み比べをしようとして、ムキになると大体はこうなる。プロシュートはザルだが、リゾットは寧ろ枠だった。そしてプロシュートは負けず嫌いで、飲みに飲んだ末に完全に理性を手放した。
酒癖とは人それぞれだが、プロシュートの場合は普段人を突き放すような態度を取っている反動なのか、必要以上に友好的になる。具体的に述べるとすれば、同じソファに座った上で、座高に結構な差があるというのに無理矢理肩を組んできた挙げ句、体をべたべたと密着してきたと思えば、人の頭巾を剥ぎ取って髪をぐしゃぐしゃと掻き混ぜてくる。
「リゾット、オレはオメーの下で働けて幸せらぜぇ！」
と、言ってプロシュートが頬にキスをしてきた上に寝てしまったの

で、リゾットはご機嫌に眠ったプロシュートを背負って彼の住むアパートまで行き、扉を開けて中に入って、所謂送り狼になった。因みに躊躇いはなかった。
リゾットはあの時も今も変わらず、胸を張って言える。「飲んだくれて寝こけていた奴が悪い」と。
プロシュートはギャングの見本のような男で、酒に煙草に女に賭博、麻薬以外の全てのプロセスを経て作られている。
ただ唯一他のギャングと違っていたのは男も女も試してみるという点で、それはその容姿が原因で「物心付いた頃には年齢性別に拘わらず様々な人間から愛の告白を受けた記憶がある」らしい。恐らく性別に関して単に頓着しない質なのだろう。
酔った勢いでか、男を抱いた事などないリゾットを上手く誘導した上、夜が明けて状況を把握してからも極めて冷静だった。
「…リゾット、すまねぇ。オレの首をメタリカでかっ捌いてくれ。落とし前は付ける」
「落ち着けプロシュート。記憶はあるのか？」
「お前の頭巾取って馬鹿みてぇに笑ってたとこまでだな。済まなかったな。野郎何て抱かせちまって」
「逆だ。オレがお前を襲ったんだ」
プロシュートはどうやら、自分が無理矢理誘ったのだと勘違いしていたらしい。リゾットが真実を告げると、理解不能だ、という顔をしてきた。
「お前がオレの頭巾を取った後、頬にキスをされた。そこでお前が眠ったからここまで送り届けた上で…襲った」
「おい…ちょっと待てどういう意味だ」
「そのままの意味だ」
寝起きなせいか、頭の回転が鈍っているらしい。プロシュートは乱暴に前髪を掻き上げる。
「リゾット、確かお前、ノーマルだよな」
「ああ、基本的にはな」

「嘘だろ」
「信じられないのなら、もう一度襲ってみるが…」
未だに言っている事を信じようとしないプロシュートに業を煮やして、リゾットは細い肩を掴んで後ろに押し倒す。威圧感も何もない丁寧な動きだが、驚きを与えるには充分だったようだ。
「…オメーには性欲なんざないと思ってた」
「そうか」
しみじみと言っているが、この場合、感嘆するのではなく慌てるべきなんじゃあないか？
「……怒ってんのか？」
「少しな」
「そういう意味じゃあねぇよ。機械みてぇに、何というか…淡白な方だと、」
「そろそろ黙れ、プロシュート」
指と指を絡ませるように緩慢に拘束して苛立ちも露わに唇を食むと、鼻先でプロシュートが笑った。
それからもう一度、朝から。

他にはソルベとジェラート、それにホルマジオしか居ない時代にそうなったものだから、後から入ってきたイルーゾォ、メローネやギアッチョやペッシは一連の成り行きと、隙だらけに笑う若いプロシュートを知らない。
イルーゾォは最初、ホルマジオに付いて任務を遂行していたから、リゾットとプロシュートが関係を露わにするような発言を初めて聞いた時も動じた様子がなかった。多分、予めホルマジオから聞いていたのだろう。それか、このチームには珍しく、人並みに気遣いが出来るからかも知れない。

メローネとギアッチョは数ヶ月しか入った時期が違わず、年齢も同じだったからどちらがより兄貴分かなどという上下関係はほぼ無いに等しい。
最初、メローネはプロシュートの後に付いて暗殺のノウハウを学んでいた。だが本人が共同生活には破滅的に向かないという事と、頭が良くスタンド能力も暗殺に向いている事から、ギアッチョが入ってくると同時に単独で任務に付くようになった。
そのギアッチョもあんな性格なので、当然のように徹底したスパルタ系のプロシュートとは上手くいかない。負けず嫌いが良い方にも悪い方にも作用して、直ぐに仕事を覚えて一人で任務をこなすようになった。
最後にペッシだが、まだ単純に来てから日が浅い。それと、リゾットとプロシュートが年相応に無邪気な若さを見せなくなったのに加えて、メローネにギアッチョというアクの強い仲間に目が行ってしまって、中々二人の関係には気付かない。
いや、気付けなかったのだろう。
不味い事に。
「ねぇねぇねぇ、リーダー、プロシュートと付き合ってどの位になるの？馴れ初めって？」
「ハァ？メローネ、何言ってやがんだよ」
「へ？あ？リーダーと兄貴が？え？え？」
メローネは兎も角、ギアッチョも気付いていなかったらしい。そして、リゾットはギアッチョとペッシが気付いていない事に気付いていなくて、更にはメローネが「興味津々です」と目を輝かせているのにも気付かなかった。
「え、ギアッチョまさか気付いてなかった？リーダーとプロシュート、付き合ってるよ？ね、リーダー」
「…まあ、そうだな」
「ハァァァ！？」
「えっ？えっ、えっ？」

失態だった。先程うっかり、煙草を買いに行こうとするプロシュートに向かって「そういえば石鹸が切れていたんじゃあなかったか？」「どこのだよ」「お前の家のだ」「ああ」そんな会話を普通にしてしまったのだ。二日間の徹夜が予想以上に堪えていたようだ。判断力が恐ろしく鈍っている。
仕事漬け故だとプロシュートも承知しているのだろう。この面子の前で致命的なミスを犯したというのに責めなかった。但し、ミスはミスだ。スッと買い物に出て行ったのはつまり「テメェが責任を取って説明しろ」という意味だ。
「それでそれで？馴れ初めは？」
また、メローネが面白がって引っ掻き回そうとするから、状況は最悪だ。
メローネはあらゆる分野に於いて偏見も常識も持ち合わせていないので興味本位なのは明らかだが、ギアッチョは固定概念に捕らわれる節があるからもうパニックの余りブチ切れそうになっているし、ペッシはペッシで漸く思考が追い付いたものの、あの兄貴がまさか、と狼狽している。
「まさかずっとリーダーが上？あのプロシュートがそれって、凄く愛されてるねリーダー」
いきなり突っ込んだ所まで聞いてくるメローネの明るい声に、ガンガンと頭痛がしてきた。
「えっ、あ、あの、その、兄貴がその、おっ…」
真っ赤になってしどろもどろに聞いてくるペッシが可哀想になってきたので、取り敢えずこちらから片付ける事にする。
「そうだな。付き合い始めてから今日まで、プロシュートが女役だ」
「珍しいね」
「そっ、そうなんですかい？」
「うん。大抵、男同士のカップルはセックスで男役と女役が頻繁に交代するのが普通。リーダーとプロシュートみたいなのは珍しい」
ペッシはあれで中々頭の回転が早いし、柔軟な思考の持ち主だ。こ

れである程度は落ち着いてくれるだろう。問題はギアッチョだ。既に半分魂が抜けている。
「ギアッチョ、大丈夫か？」
「付いていけねぇ…」
「…そうか。プロシュートにこの話題は振るなよ」
「振らねぇよ。だったらメローネに言えってんだよ、クソッ！」
確かにそれもその通りだ。
横を見れば何やら目をキラキラと輝かせたメローネが顔を真っ赤にしたペッシにずっと耳打ちをしている。知らなくても良い知識を悪戯に授けているのは明らかだ。ペッシもペッシで敬愛する兄貴分の事を理解しなくてはと思っているだろうから、そろそろ誰かが止めねばなるまい。
「メローネ」
「なに？リーダー」
「メタリ…」
「うんごめんペッシまた今度ね！」
素早くペッシから離れるメローネがひらりと軽い足取りでパソコンルームへと逃げる。相変わらず要領の良い奴だ。
「…寝る。途中で起こしたらブチ割る」
げっそりと疲れた様子のギアッチョが仮眠室に入るのを見届けた所で、ペッシが「あ、オレ、シャワールームの掃除があるんで…」と退散した。賢明な判断だ。
「おう、帰ったぞ」
程なくしてプロシュートが帰ってきたので、ギリギリだったかと胸を撫で下ろす。もしも今状況が混乱を極めていたら、グレイトフル・デッドの直、という事も充分にあり得る。
「済まないな…一応、三人に説明はしておいたぞ」
「あ？何の説明だよ？」

正に、絶句。リゾットは自分の耳を疑った。
「…待て、プロシュート。何も言わずに出て行ったのはそういう意味じゃあないのか？」
「意味が分からねぇな。そっちこそ説明しろよ」
眉を寄せるプロシュートは、どうやら一体何が起こっているのか皆目見当も付かないでいるらしい。信じられない事だが…そもそもリゾットの失言にすら気付いていないのだろう。奇跡的に…ならば、先程まで三人にしていた遣り取りは一体何だったというのか。
付き合いが長くなって気を許してくれるのは大いに結構だが、これは…油断し過ぎなんじゃあないのか？
「おいリゾット、さっさと言えよ」
新たに発生した本日最大の問題に、リゾットは思わず頭を抱えたくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6899y/

石鹸に纏わる問題発言について

2011年11月20日20時24分発行